

洞雲寺

洞雲寺は、徳川家康、秀忠、家光の三代の将軍に使えて功績によって、この地の領主となった安部撰津守信盛のぶもりによって建てられました。信盛は、この地方にふさわしい寺院を建て、村人の心を安定させたいと考え、半原村、堀切村、大原村の助けを得て、真言宗の「浄流寺」じょうりゅうじを建てました。

その後、正保2年（1645年）、徳川家光の小姓頭で将来を嘱望されていた信盛の次男、信孝のぶのりが35歳の若さで病死しました。次いで信孝に仕えていた依田源兵衛よだが殉死したことを哀れんだ信盛は、1659年（万治2年）、信孝の法名（大応院殿月峰洞雲大居士）のぶのりから寺名を「洞雲寺」に改め、菩提寺としました。しかし、もともとこの地域の住民は慈廣寺（曹洞宗）の檀家だったため、多数の村民が宗派を変えたり、檀家をやめたりすることが大きな問題となりました。

洞雲寺には、半原藩士族の供養塔をはじめ、「森の石松」の墓、中村メイコさんが建てたお墓もあります。メイコさんの母方の先祖、菊地安兵衛は岡部藩の名だたる重

洞雲寺と千葉周作との関係

江戸末期、武蔵国岡部藩の剣術指南番の塚越又右衛門は、北辰一刀流の創始者・千葉周作の実兄である。1868年（慶応4）、岡部藩は半原へ藩庁を移転し、半原藩となった。藩主に従って半原に移転した者は111名（安部家の家臣233名：明治3年）で、周作の甥の成直なりなお（2代目又右衛門 明治5年死去）もその一人である。成直はじめ、その縁につながる武士の供養塔が当山に祀られている。

臣でした。当時の有名な言葉に、「安部にも過ぎたるものが二つある。『菊地安兵衛』と『とび焼の瓶』かめと謡われました。



正面が真言宗松陽山洞雲寺本堂
本山は仁和寺